【論　文】

本生譚に見える龍宮訪問譚
――日中韓の受容様相を試みて――

金　孝珍

一、はじめに

釈迦の本生を語る本生譚（梵語のジャータカ）は、釈迦が悟りを得る前に幾度も生まれ変わり、衆生を救うために様々な善行と功徳を施し修行を積み重ねた話である。南・東南アジアに広がった上座部仏教（南伝仏教）のパーリ語版の『ジャータカ』には547話のジャータカ説話が見られ、さらに中央アジアを経由してチベットやモンゴル、中国、朝鮮半島、日本などに広がった。所謂北伝の大乗経典には、南伝の『ジャータカ』に見られない本生説話が多く見られ、実際の本生譚の数はそれ以上であることが考えられる[1]。

本生譚の中には前世の釈迦が貧窮の衆生を救うために龍宮に行き、様々な難関を乗り越えて如意宝珠を得て衆生救済を果たすという仏教説話が多く見られる。本稿ではこれらを龍宮訪問本生譚として論じることにする。龍宮訪問本生譚は前世の釈迦が龍宮に行き如意宝珠を得て衆生を救済するという基本の枠組みは共通しているが、前世菩薩の名をはじめ細部にわたって相違点が多く見られる。

本稿では北伝の漢訳経典を取り上げて、その中に見られる龍宮訪問本生譚の話型と細部の話素を分析したうえで、それらが日中韓3国の説話などにどのように受容されているのか、その受容様相を明らかにすることを試みた。

本学現代教養学部非常勤講師

二、漢訳経典に見られる龍宮訪問本生譚

漢訳経典に見られる龍宮訪問本生譚は『生経』巻1第8話「仏説墮珠著海中経」、『六度集経』巻1、『賢愚経』巻8「大施抒海品」、『仏本行集経』巻31、『不空羂索神変真言経』巻12、『大智度論』巻4と巻16、『四分律』巻46「破僧犍度」、『賢愚経』巻9「善事太子入海品」、『大方便仏報恩経』（以下報恩経）巻4「悪友品」、『根本説一切有部毘奈耶破僧事』巻15に見られる[2]。これらを体系的に分析するためには、時代別、話型別の分析が必要であろうが、経典は成立年代そのものが不明なものが多いため、話型別に分けて、龍宮訪問本生譚の全体像を考察する。

そこで本稿では、龍宮訪問本生譚の話型を主題および内容の核心をなすモチーフを中心に分け、海に落とした、または龍神・海神に奪われた如意宝珠を取り戻すため海水を汲み干す話を「海水汲み干し型」、龍宮に行くために何度も輪廻転生を重ねる話を「輪廻転生重ね型」、そして善人の兄が悪人である弟の妬みにより流離し艱難辛苦の末に本国に帰るという話を「兄弟対立型」と命名し分類した。

岩本裕氏によれば南伝の『ジャータカ』の形式はいずれも

（一）現在物語――いかなる場合にブッダが比丘たちにこの物語を語ったかを記す部分。

（二）過去物語――ブッタの前世物語で、ブッダが前世においてどのような功徳を積んだかを物語る部分。

（三）連語――過去物語における登場人物のそれぞれを現在の人物に結びつける部分。

の三部分ならなるという[3]。

この「（一）現在物語」はいわばブッダが比丘らに向けて何を説法するためにブッダの前世物語を語るのか、その理由やきっかけを語る導入部分であるが、北伝の漢訳経典にはその導入部分が見られるものと見られないものが混在している。龍宮訪問本生譚の全体像を論じるために、本生譚を語る理由

がわかる導入部分、または本生譚の主題を述べる部分も含めて考察する。

（一）「海水汲み干し型」

「海水汲み干し型」は『生経』巻1第8話「仏説墮珠著海中経」、『大智度論』巻4と巻16、『六度集経』巻1、『賢愚経』巻8「大施抒海品」、『仏本行集経』巻31、『不空羂索神変真言経』巻12「広博摩尼香王品」に見られる。これらの話素を表にまとめると以下のようになる。

【表】1.「海水汲み干し型」の話素分類（記載がないものは「×」で示した）

経典／話素	生経	大智度論（巻4）	大智度論（巻16）	六度集経	賢愚経（大施抒海品）	仏本行集経	不空羂索神変真言経
①導入部	比丘らに精進を語る部分	問答形式で毘梨耶波羅蜜について説く部分	問答形式で精進波羅蜜について説く部分	六度の布施について語る部分	比丘らが阿難に仏の侍者になることを勧める部分	比丘らに精進力で三菩提、七道分、法宝のすべてを得られることを語る部分	香の威力について語る部分
②主人公名	導師（商主）	大施菩薩	好施菩薩	普施商主	大施（婆羅門の子、太子ではない）	商主	成就諸事居士商主
③結婚談	×	×	×	○	○	×	×
④得た如意宝珠の数	一つ	×	×	銀城、黄金城、瑠璃城の龍王から三つの宝珠	銀城、青瑠璃城、金城の龍王から三つの宝珠	一つ	不明
⑤如意宝珠を落とした理由	海龍神は方便を使い導師が首にかけていた如意珠を海に落とす	×	×	海神は人に変身して、普施に宝珠を見せてくれるよう頼んで、その時に奪い去る	大施が仮眠している時に奪い取る	商主が海に落とす	海で失くす
⑥海水を汲み干す道具	器	×	×	瓢	亀の甲羅	杓	香を塗り誓願して海水を汲む
⑦海水を汲み干す際の助力者	×	×	×	遍浄天	首陁会天が天衣で海水を汲む	×	×
⑧両親の開眼	×	×	×	×	○	×	×

まず、西晋の竺法護（235～316）が太康六年（285）に漢訳した『生経』には、龍宮訪問本生譚のもっとも単純な形が収められている。本生譚を語る導入部に、精進の力によって仏になることができた釈迦自らについて語る部分があり、最後の部分には、精進の力で宝珠を得て、貧窮の衆生を救済したとあるため、その主題は精進にあると言える。また闍那崛多（523～600）が漢訳した『仏本行集経』も精進について語った本生譚で、主人公の名前が明記されずに、導師（商主）とされている点や、訪問した龍宮が一箇所であり、得た宝珠の数が一つである点などが、『生経』と類似している。

鳩摩羅什（344～413）を中心に500人以上の学僧が翻訳に当たって完成した『大智度論』には、巻4と巻16の2箇所に海水汲み干し譚が見られる。これらは、問答形式で毘梨耶（精進）波羅蜜について説く形式になっている。非常に簡潔な記述になっており、大施菩薩（巻16は好施菩薩）が精進して海水を汲み干して宝珠を得たところのみ記されている。特に巻4は六波羅蜜について説くため本生譚と結びつけている特徴がある。檀波羅蜜には尸毘王、尸羅波羅蜜には須陀須摩王、羼提波羅蜜には羼提比丘、毘梨耶波羅蜜には大施菩薩と宝窟の中で修行中の弗沙仏を見て七日七夜瞬きもしないで片足立ちで讃えた外道仙人の話、禅波羅蜜には闍梨仙人の話、般若波羅蜜には劬嬪陀大臣本生譚が証例として挙げられている。

一方、『六度集経』と『賢愚経』は海での冒険部分が長く、3つの龍宮城を経て3つの宝珠を得る部分や海に向かっている途中で婚姻の話がある点、そして海水を汲み干す際に助力者が天から降りてくる点など類似するところが多いが、本生譚を語るきっかけの導入部分に差異が見られる。

呉の康僧会（？～280）訳とされる『六度集経』は、経典名からわかるように六波羅蜜の布施、持戒、忍辱、精進、禅定、明度無極高行（智慧）を全8巻にわたって説いているが、1～3巻が布施波羅蜜の構成で、全91章のうちの26章を占めていて、もっとも比重が大きい。『六度集経』の「普施」は布施波羅蜜の証例として挙げられており、『大智度論』巻4の大施菩薩では毘梨耶（精進）波羅蜜を説く例として挙げられているのとは対照的である。

元魏の沙門慧覚らが445年に翻訳した『賢愚経』（巻8「大施抒海品」）では、仏が侍者として阿難を置こうと思っていた時に、弟子らがその意を汲み、阿難に仏の侍者になることを勧めるくだりに出てくる。文末に布施や慈愛（善行）、孝行などの話が付け加えられており、一つの主題にしぼって語られた例話ではない。また、12年間諸天に祈願して大施を得たこと、大施の命名の謂れ、そして大施が城を出て民の生活ぶりを見て国の倉庫を開けて布施をして大臣と衝突があったこと、財宝を得るためにどうするか諸人に問う場面、また大海に入ることを両親に許可してもらうために6日間食事を絶ったこと、両親の目が見えなくなり宝珠で開眼させる点などがあり、これは他の「海水汲み干し型」に見られず、後述する「兄弟対立型」に見られる要素である。

『不空羂索神変真言経』は初期密教の経典で唐代の709年頃に菩提流志によって漢訳されたもので[4]、巻12の「広博摩尼香王品」に「海水汲み干し型」本生譚が見られる。香の神力で海水を汲むと一日も経たないうちに海水が枯れそうになったので龍王が珠を返したという内容になっていて、密教系の経典の「海水汲み干し型」本生譚の受容の様子を知ることができる。

このように同じ「海水汲み干し型」であっても、細部の違いはもちろんのこと主題においても『生経』と『仏本行集経』、『大智度論』（巻4と巻16）が精進であるのに対して、『六度集経』は布施、『賢愚経』は布施、慈悲、孝順など、『不空羂索神変真言経』は香の神力を語っており、それぞれ異なっている。

（二）「輪廻転生重ね型」

『大智度論』巻12に収められている「能施太子」は大医王から忉利天上、婆迦陀龍王の龍太子、そして閻浮提の大国の能施太子へと転生を経て、如意宝珠を得るために龍宮に行って帰る本生譚である。この箇所は檀波羅蜜について語る部分で、布施を行うことで毘梨耶波羅蜜が生じることを説く内容になっており、布施にその主題がある。輪廻転生を重ねる話型は他には見られず、唯一『大智度論』巻12にだけ見える。「能施太子」には、盲目の陁舎と

いう老人が龍宮までの案内人として登場しているが、これは他の「海水汲み干し型」にはなく、『賢愚経』（巻 8「大施抒海品」）同様、後述する「兄弟対立型」に見られる話素である。

（三）「兄弟対立型」

「兄弟対立型」は『四分律』巻 46 破僧犍度「善行王子」と『賢愚経』巻 9「善事太子入海品」、『報恩経』巻 4 悪友品第六「善友太子」、『根本説一切有部毘奈耶破僧事』巻 15 に見られる。この型は、善人の兄と悪人である異母弟という善悪の対立構造になっている。話の流れは衆生救済の目的で海に如意宝珠を探しに行く兄が、同行した弟に如意宝珠を奪われ目を刺されて盲目となり、流離を余儀なくされるが、紆余曲折を経て本国に戻り、弟を罰することなく許すというものである。善人の兄は釈迦の前世、弟は提婆達多の前世であり、この現世はもちろん前世においても悪事を働く提婆達多について語る因縁譚である[5]。

「兄弟対立型」には先述の「海水汲み干し型」や「輪廻転生重ね型」に比べると、より複雑な話素が多く入り混じっているため、①主人公名②子宝祈願③許嫁④海に行くことを反対された兄が七日間断食⑤盲目の道案内老人⑥宝山で同行人との別れ方⑦得た如意宝珠の数⑧弟が兄の目を刺して宝珠を奪う⑨弟が兄の結婚相手に求婚⑩兄の流離地⑪両親が鳥類を使い息子に消息を伝える⑫結婚相手との出会い⑬盲目になった兄の開眼⑭両親の開眼⑮再度弟が兄の命を狙う、という 15 の話素に分けて、簡単に表にまとめた。

【表】2.「兄弟対立型」の話素分類（記載がないものは「×」で示した）

話素＼経典	報恩経	賢愚経（善事太子入海品）	四分律	根本説一切有部毘奈耶破僧事
① 主人公名	善友太子（宝鎧王の長男）	善事太子（宝鎧王の長男）	善行王子	善行太子（婆羅痆斯国）
② 子宝祈願	子宝を祈願して12年後に子供が生まれる	天神の教え。森の金色仙人の二人が王家に生まれる	水神の教え。修羅吒河の仙人の二人が夫人の胎に入る	×
③ 許嫁	○	○	○（生まれる前から）	○
④ 兄が七日間断食	○	○	×	×
⑤ 盲目の道案内老人	○	○	×	×
⑥ 宝山で同行人との別れ方	太子は同行と別れて宝珠を探しに行く	太子は同行と別れて宝珠を探しに行く	宝山で兄は弟に置き去りにされる	太子は同行と一緒に宝渚で如意珠を採る
⑦ 得た如意宝珠の数	1つ（1つの龍王城、玉女の取次がある）	500天女から500個を得る	1つ（3つの龍王城を寄る）	1つ
⑧ 弟が兄の目を刺して宝珠を奪う	○	○	○	○
⑨ 弟が兄の結婚相手に求婚	×	×	○	×
⑩ 兄の流離地	梨師跋国。牛が兄の目に刺さった竹を舐めると竹が抜ける。牛牧人の所に滞在。その後、王の果樹園の守になる	梨師跋陀国。牛が兄の目に刺さった竹を舐めるのを見て、牛牧人が竹を抜く。牛牧人の所に滞在。その後、王の果樹園の守になる	月王の果樹園守である老婆の子の子守	流浪する善行太子を牛牧人が世話する。牛牧人の妻に誘惑され断ると、恨まれて牛牧人の所を出て流浪する
⑪ 鳥類を使い息子に消息を伝える	○（白い雁）	○（雁）	×	×
⑫ 結婚相手との出会い	果樹園で箏を奏でながら楽しむ太子を見る	果樹園でみすぼらしい太子をみる	果樹園で琴を弾いている時	夫にしたい男性を探しまわってる時に太子が弾く琴の音を聞く
⑬ 盲目になった兄の開眼	片方は妻が身の潔白を誓願する時、また片方は太子が妻に自分の身分を証明する時	片方は妻が身の潔白を誓願する時、また片方は太子が弟を恨まないことを誓う時	王子が月王の前で自分の身分を証明する時	片方は妻が真心で太子を夫として仕えたいと誓願する時、また片方は太子が弟を恨まないことを誓う時
⑭ 両親の開眼	○	×	×	×
⑮ 再度弟が兄の命を狙う	×	×	○	×

まず、『報恩経』は、『仏書解説大辞典』や『大蔵経全解説大辞典』によれば、訳者不明で220年に翻訳されたとある。この経典は本生因縁形式の七巻九品構成で、「善友太子」は「悪友品」に収められている。『報恩経』が220年に翻訳されたとすると、漢訳経典の中ではもっとも早い時期の「兄弟対立型」といえる。

『賢愚経』はブッダをはじめ、仏弟子や婆羅門から賢者、愚者にいたる人々までの前世を語り、その報いにより現在の結果があるという因果応報の小話が集められているが、前述した「海水汲み干し型」の巻8「大施抒海品」では阿難の過去因縁が語られているのに対して、当該箇所の巻9「善事太子入海品」では提婆達多の過去因縁が語られている。『賢愚経』「善事太子」は【表】2で明らかなように『報恩経』とかなりの部分で類似点があるものの、細かい点においては相違が見られる。例えば、話素⑤を詳しく見ると、『報恩経』では盲目の老人の元を国王自らが訪ねて太子との同行を頼んでいるが、『賢愚経』では太子自身が訪れている。弟が兄の目を傷つける話素⑧の場面でも、『報恩経』では仮眠している兄の目を竹で刺して宝珠を奪っているが、『賢愚経』では弟が交互に宝珠を守ることを提案して、兄の仮眠中に森に行き、樹を取ってきて兄の目を刺して宝珠を奪っている。また、話素⑩の国王の果樹園の森になる経緯も『報恩経』では雀から果樹を守るためとなっているが、『賢愚経』では雀ではなく鸚鵡になっている。その他にもっとも大きな違いは、話素⑭の両親の開眼要素の有無である。

『四分律』は経典名からもわかるように教団内の規律を説いたもので、西域僧の仏陀耶舎と中国僧の竺仏念が共訳して、姚秦の弘始14年（412）に完成したものである。「善行王子」は巻46の「破僧犍度」に収められている。ここでは城の外の民の具体的な生活ぶりは語られず、大海に行くまでの経緯も他の経典に比べると詳細に語れられていない。しかし弟が七宝の島に兄を置き去りにしたり、また兄の結婚相手に求婚したり、一度自分の罪を許してくれた兄の命を再度狙うところが追加されていて、他の経典に比べ弟の悪人のイメージがより強くなっている。

唐の義浄が長安3年（703）に漢訳したとされる『根本説一切有部毘奈耶破僧事』巻15に見られる善行太子の話は、上記の3つの経典とはかなり異なる要素が多く見られる。まず、大海行きを決心する場面を見ると、備蓄された財産には限りがあるとして国王に布施を止めさせられたので、太子は大海行きを決しており、両親はそれを引き留めることはしない。そして、如意珠を得た場所が龍宮ではなく、宝渚である点や王位に就いた弟を武力で追い出した結末は、他の「兄弟対立型」と最も異なる点である。

龍宮訪問本生譚は、異界である龍宮を訪問して呪宝を獲得するという説話を仏教説話に取り入れて、物語としての趣向を凝らしながら、大衆に対して宗教的な説得と教化を行うという目的を達成するために説法のそれぞれの場面に応じてバリエーションをきかせて作られていることがうかがえる。このように複数の話が存在する「海水汲み干し型」と「兄弟対立型」が、中国や日本、韓国においていかなる話型として受容されているのかを次項で検討する。

三、中国編纂の経典に見られる龍宮訪問本生譚

中国で編集編纂された『経律異相』、そして『四教義』をはじめとする天台系の書物、華厳宗の『華厳懸談会玄記』、敦煌資料の『雙恩記』には龍宮訪問本生譚が見られる。以下、順に検討を加えていく。

（一）『経律異相』

『経律異相』は梁の武帝の勅命により天監7年（508）に僧旻が撰集し、再度勅命によって、天監15年（516）に宝唱が中心となって増補改変したもので、全50巻の中に782話が収められた一種の類書のような構成になっている。『経律異相』には（1）巻第9「入海採珠以濟貧苦十」、（2）巻32「能施王子入海採宝縁」、（3）巻32「善友好求珠喪眼還明」の3つの龍宮訪問本生譚が見られる。

まず、（1）「入海採珠以濟貧苦十」は「海水汲み干し型」のもので、文末に「出生経第一巻」とあるように『生経』の「仏説墮珠著海中経」とほぼ同

内容であるが、本生譚を語る導入部に違いが見られる。『生経』では、霊鷲山で比丘ら同士が、仏は無数の劫の間精進を怠ることなく、また生死五道の苦も厭わず、仏道を成就して衆生を救済したと話し合っているのを仏本人が聞き、それが真実であることを話すために本生譚を切り出しているが、『経律異相』ではこの部分が省略されている。(2)「能施王子入海採宝録」は文末注にあるように『大智度論』巻12の「能施太子」の話で、「輪廻転生重ね型」である。『大智度論』「能施太子」の導入部分の問答の箇所は省略されているが、ほぼ同じ内容である。(3)「善友好求珠喪眼還明」は「善友太子」の話で、「兄弟対立型」である。

この『経律異相』の「善友太子」は『報恩経』『賢愚経』『四分律』の3つを合わせて新たなものに再編集しているという特徴がある。従って先述の15の話素に沿って、典拠とした経典と比較して内容を見ていくと以下のようになる。なお、1つの経典のみに見られる話素を取り入れている場合は「導入」、2つ以上の経典に見られる話素を選択して入れている場合は「採択」と表記した。

①善友太子。波羅榛国の月蓋王の長男。名前は『報恩経』を採択。太子の命名については太子の生後、良いことが次から次へと起きたという『四分律』の内容と、母親が出産後に悪い性格から善人へと変わったという『報恩経』『賢愚経』の内容が両方が入っている。

②子宝祈願後、子供が生まれるまでの経緯は『四分律』部分を採択し、『賢愚経』に「金色仙人」とあることにのみ注をつけている。

③生まれる前から親同士が隣国の月王の娘と結婚を約束。この部分は『四分律』を導入。

④貧窮に苦しむ民、また生きるために殺生しなければならない生活ぶりを見て海に行くことを決心する部分は『賢愚経』『報恩経』を採択。

⑤国王が道案内できる老人を訪ね、太子について行ってくれるよう頼む。『報恩経』の部分を採択。

⑥宝山に着き宝を採り、弟と同行した500人と別れて、道案内老人と2

人で摩尼宝を探しに行く。この部分は『賢愚経』『報恩経』を採択。

⑦龍王から宝珠を得る部分は『報恩経』を採択し、割注に『賢愚経』の内容を紹介する。

⑧宝珠を弟に奪われる部分は『報恩経』を採択し、『四分律』の兄の目を刺した樹の名にのみ注をつけている。

⑨弟が兄の結婚相手に結婚を申し込む話はない。

⑩兄の目に刺さった竹を牛が抜いたり、国王の果樹園守になるまでの話は『報恩経』を採択。

⑪白い雁を使い消息を伝えるところは『報恩経』を採択。

⑫王女との出会い、結婚までの経緯は『報恩経』を採択。

⑬太子の開眼は『報恩経』を採択。

⑭両親の開眼は『報恩経』を導入。

⑮父王の死後、再度弟が兄の命を狙って斬ろうとする話は『四分律』と類似。『四分律』では弟の手が切られたとあるが、『経律異相』では弟が王になった兄の首を斬ろうとすると、自分が首を切られたとある。

このように『経律異相』には上記の３つの龍宮訪問本生譚の話型がすべて収録されており、(1) は菩薩部に、(2) (3) は諸国太子部にそれぞれ分けて入れていることを考えると、３つの話型の説話を別物として認識していたことが考えられる。既述したように「海水汲み干し型」は『生経』以外の他の経典にも見られるが、『経律異相』では『生経』の話のみが紹介されており、３つの経典に見える「兄弟対立型」の話を１つにまとめているのとは対照的である。なお (3) の「善友太子」は文末に「出大方便仏報恩経第四又出賢愚経第二生経大同小異」とあり、『生経』とも大同小異の内容であるとしているが、『生経』の話と類似する部分は見当たらない。

つまり『経律異相』の「善友太子」は『報恩経』『賢愚経』『四分律』を１つの本生譚としてまとめているが、話素⑨弟が兄の結婚相手に求婚する話を除き、１つの経典にのみ見られる話素はそのまま取り入れ、一方異なる内容が見られる場合には３つのうちどれかを採択する姿勢が見られ、このような

取捨選択によって作られたことがわかる。

（二）『四教義』と『華厳懸談会玄記』

『四教義』は天台学を確立した隋の智顗禅師（538～597）が撰じたものである。『四教義』巻7には六度を本生譚と結びつけている内容が入っているが、先述した『大智度論』巻4と波羅蜜の個々の名称や比喩例の本生譚はまったく同じである。毘梨耶波羅蜜には大施太子の例が挙げられており、『大智度論』巻4よりもう少し詳しく記されている。その内容を見ると、海に行き龍王から如意珠を得て、閻浮提の衆生を救済しようとした際、海神が珠を取り戻そうとして太子が寝ている間に珠を盗み海宮に還ろうした。そこで、太子は海水が乾くまでたゆまず海水を汲み干すと誓い、帝釈諸天が太子の心に感心したとある。仮眠している太子から珠を盗むという話素は『賢愚経』（大施抒海品）と同じである。『四教義』の六度説法の本生譚例話は以後天台系の仏書に継承されている。智顗が著述した『摩訶止観』巻6上では六度とその比喩例の本生譚に簡単に触れられているが[6]、妙楽大師湛然による『摩訶止観』の注釈書『止観輔行傳弘決』巻3の3には、これに関する詳しい注釈がついている。精進波羅蜜の比喩本生譚では、『大智度論』巻16と同じく「好施太子」となっており、さらに「疋（たと）ひ筋骨を使ひ枯盡するも、終に懈廃せず（正使筋骨枯盡、終不懈廃）」という表現もまったく同じである。また、珠を海に落とした話素は『仏本行集経』、海水を汲むのに助力した神がいるのは『六度集経』『賢愚経』に見られる話素で、「海水汲み干し型」の諸経典が入り混じっていることがわかる。

時代は下るが、元代の華厳宗の僧である普瑞が書いた『華厳懸談会玄記』巻20にも六度に関する記述に精進波羅蜜の例話として大施太子本生譚が入っており、『大智度論』巻4の六波羅蜜と本生譚の結びつきは華厳宗にも見られる。『華厳懸談会玄記』は華厳宗の第4祖と伝えられる清涼澄観(738-839)の『華厳玄談』に注釈をつけたものである。大施太子本生譚は『華厳玄談』「大生太子抒海進満」の部分に注釈がついている。注釈には大生太子の表記を大施太子に変えて、大施太子が海に入り如意珠を得たが、眠っている

間に海神らに奪われた。しかし太子の精進に感動した諸天に助けられて、海水が半分に減り龍が珠を戻したという内容で、大きな変容は見られない。

中国で編集編纂された経典に見られる「海水汲み干し型」本生譚は、『経律異相』や『四教義』などの天台系、『華厳懸談会玄記』の中に確認できるように精進を主題とするものとして語られる。そしてここでは『六度集経』や『賢愚経』（大施抒海品）に見られる結婚や3つの龍宮城に寄る話、『賢愚経』（大施抒海品）にある両親の開眼の話素はまったく見られない。推測の域を出ないが、精進というテーマに重点を置くために、「兄弟対立型」に見られるこれらの話素を取り入れなかったのではないだろうか。

（三）『雙恩記』

『雙恩記』は敦煌資料の発掘によって知られた写本で、『報恩経』の経文を挙げ、その後散文と韻文を織り交ぜて講経する変文形式の台本になっている[7]。唐代以降には仏教を大衆により分かりやすく伝える工夫として、絵や韻文を用いた仏教説話の台本を作って説く俗講が盛んになったが、『雙恩記』も俗講文学の一つである。『雙恩記』は変文の特徴や宋代文学との関係から成立年代は10世紀末から11世初頭であろうと指摘されている[8]。

現存するものは巻3と巻7、巻11の3つのみで、全体像の把握は困難だが、巻7、巻11には『報恩経』の「善友太子」の一部分が収められている。巻7には、宮城の外に遊びに出かけた太子が貧窮の民が生活のために殺生をするのを見て、国の倉庫を開けて救済するが、それには限りがあるので、どうしたらいいのか大臣らと相談し、大海に如意宝珠があることを知って、海に行くことを父親に告げている場面までが書かれている。巻11には、善友太子が宝珠を得て弟の悪友太子と再会するが、弟に目を刺され宝珠を奪われて利師跋王国にたどり着き、目に刺さった竹を牛に舐めてもらったことで竹が抜け、牧牛人のところに世話になった後に国王の果樹園守になったところまでが描かれている。全体的に所々に韻文や会話文が挿入されていて大変長くなっている。

具体的に『報恩経』と『雙恩記』（巻7）の対応する散文部分の一例を現

代語訳して比較してみると、『報恩経』では、

王は出かけて帰ってきた太子にどうして愁い悩んでいるのか尋ねた。太子は外で見た事を具に申し上げた。王はそれを聞いて太子に、「このようなことは世の常のことだ。愁うことはない」と言った。太子は王に「一つお願いがございます。それを叶えていただけますか」と尋ねた。王は、「第一子である汝をわしはとても愛している。だから汝の意に逆らうことはしない」と言った。太子は父に、「お父様のすべての倉庫にある財宝と飲食を布施したく存じます」と言った。王は、「汝の願い通りにするがよい。汝の意に逆らうことはしないつもりだ」と言った[9]。

とあるが、『雙恩記』巻7では

王は太子に、「外に遊行に行って帰ってきたのにどうして楽しんだ顔ではないのか」と尋ねた。太子は、「お父様、私は城の外に出て園苑を見て遊ぼうと思っておりましたが、世の中がこのように辛いとは知りませんでした。骨肉（家族）の生活のために、衣食のために害を加えています。田を耕し、虫が出ると烏がこれをつついて食べます。機織りの婦人は子に苦労をかけます。屠畜者は牛羊を戮し、狩人と釣り人は雀と魚を捕ります。互いに害を与え、ついには冤家になります。真のことが心を謾(あざむ)き、強者が弱者を欺きます。そのゆえに見かねて馬車を戻して帰りました。衆人がこのように苦しんでいるのに、独りでどうして快楽することができるでしょうか」と答えた。（偈は省略）

王は、「汝は全く錯誤している。人の世の貧富はすべて業によるものだ。人は衣服で体を包まないといけない。また食することで身を養うものだ。糸を紡がずにどうして衣服を作ることができるのか、また種を撒かないでどうして粟麦の穀物を求めることができるのか。飛禽や走獣もみな同じである。果報によって形が異なるといっても、業縁の組み合わせにより互いにむさぼり喰う。鼠が猫に殺されるのは、人がそう教えたのではない。また蝶が蜘蛛の巣にひっかかるのは、すべて天がそうさせたのである。汝よ、嘆き悲しまないでくれ。これはすべて世の常の規(きま)り

なのだ。もし我の精神（心）を悩ませるなら、それをどうして孝道といえるのか」と言った。

太子は、「そうでしたら、お父様の意に背くことはしません。ただ一つの願いを聞いていただけますでしょうか」と言った。王は、「汝がただわしの意のあるところをくみ取り、音楽を楽しめば、汝の求めのすべてにわしは随うつもりだ」と言った[10]。

とある。『雙恩記』は『報恩経』と比べると、国王と太子のやり取りがかなり詳しく語られているが、注目すべきところは、国王が太子に、嘆き悲しむ姿を親に見せ、親を苦しませるのは不孝であると伝える部分である。『報恩経』では、子を愛する父が子のために子が願うところのすべて聞いてやるという趣旨で、親を悲しませることが孝道でないというところまでは踏み込んではいないが、『雙恩記』では話をより広く展開している。このような傾向があることは巻 11 の牧牛人と太子のやり取りにも見られる[11]。

講経文は、経典にいない人物が現れるなど、もととなった経典からかなり外れる場合があるが、それに比べると、『雙恩記』は『報恩経』の経文の内容に対して比較的忠実な敷衍を施している[12]。要するに『雙恩記』では経典に記されていない登場人物間のやり取りを挿入してはいるが、経文の内容から逸脱しない程度で自由に変容しているといえよう。

四、日本に見られる龍宮訪問本生譚

日本では経典だけでなく、文学作品などの様々な書に「海水汲み干し型」の大施太子説話と「兄弟対立型」の善友太子説話の 2 つが点在している。

（一）大施太子本生譚

まず、日本に見られる大施太子本生譚は、中国同様天台系の文献に多く見られる。隋の智顗が確立した天台宗は、平安時代に最澄が唐から持ち帰って日本に広がり大いに盛んになった。平安初期の天台宗の僧義真 (781～833) によって著わされた『天台法華宗義集』（巻 1）には六度に関する説明があり、六波羅蜜と本生譚を結び付けている。個々の波羅蜜の名称や比喩例は

『大智度論』巻4と同じである。毘梨耶波羅蜜には『大智度論』と同様に宝珠を取り戻すために海水を汲み干そうとした大施太子の話と、7日間片足立ちで弗沙仏を讃えた話が挙げられている。ただし大施太子の具体的な話は智顗の『四教義』と同じ内容である。その後の書物である『三宝絵』や『雑談集』に毘梨耶（精進）波羅蜜の比喩・例証として大施太子本生譚が挙げられている。

『三宝絵』は18歳で出家した尊子内親王（冷泉院皇女）のために源為憲が編んだ仏教入門書である。『小右記』天元五年（982）4月9日の記事によれば、尊子内親王は人に知らせず密かに自ら髪を切るという奇怪な行動をしたことが語られていて[13]、その後に落飾、受戒している。そういった事情があり円融天皇が自発的に髪を切った尊子内親王に道心を励まし完全剃髪への志を高めるため、源為憲に依頼して執筆させたと考えられる[14]。

『三宝絵』上巻には13話の本生譚が入っているが、序盤の6話が六波羅蜜の本生譚の例話である。『三宝絵』では、精進波羅蜜の比喩例として『大智度論』をはじめとして天台系の仏書に取り上げられていた「海水汲み干し型」の大施太子を例話として挙げ、文末に「六度集経、報恩経等に見えたり」と典拠の仏典が掲げられている。龍王の宮に行き宝珠を得るまでの前半は『報恩経』を引用しているが、悪友太子と関わる部分は意図的に取り除かれている。そして、後半の海水を汲み干す部分は『六度集経』を引用し、最後の結末部分は、『六度集経』が布施を語っているために避けて、再び『報恩経』の内容を取り入れている。

前半は『報恩経』を引用しながら後半部にいたってその典拠を『六度集経』に変え、筋立てを転換したことについて金泰光氏は、天台系の六波羅蜜の精進波羅蜜に「海水汲み干し型」が以前から引用されてきたことから、「海水汲み干し型」の結びにするためだったと指摘する[15]。また中村史氏は、「説話の転換の中に、仏と提婆達多の因縁を説く善友太子型の主題から解放されたために、悪役の弟が切り離されるという動きがあったのであろう。このように、大施太子本生譚は、日本文学の『三宝絵』を待ってその誕生が確

認される稀有の例である」と指摘している[16]。

『三宝絵』の大施太子本生譚は、創作が入っていないにもかかわらず、布施に主題がある「海水汲み干し型」の『六度集経』と、「兄弟対立型」の『報恩経』の両者を精進のテーマに合わせて再構成し、原出典とは異なる新たな物語として生まれ変わっている。

鎌倉時代の『雑談集』（7巻4「精進懈怠事」）にも大施太子本生譚が見られるが、これには大施太子が如意珠を求め、貝をもって大海を汲む時に誓願すると、天人が助けて天衣で海水を汲み鉄囲山の外に捨てたので、龍王が珠を返した、という内容のみで、『三宝絵』の大施太子本生譚のような変容は見られない。

一方、平安末期の仏教説話集である『宝物集』下巻「発願」にも大施太子の話が見られるが、これには太子が波羅奈国の王子であること、母が大海行きを許可してくれるまで食事を絶つ内容があり、『報恩経』の善友太子の話素が入っている。また、後の時代になるが、室町時代中期に沙弥玄棟が撰じた『三国伝記』巻第9第4「大施太子至龍宮乞如意珠事」にも、太子が波羅奈国の皇子として登場する点や大海行きの許可を得るために死を覚悟する場面、道案内の盲目の老人が登場するなど『報恩経』の話素が入っている。これが『三宝絵』の影響によるものかどうかは明確にできないが、主題を「海水汲み干し型」に置きながら、「兄弟対立型」の話素を取り入れた変容がここでも確認できる。

（二）善友太子本生譚

「兄弟対立型」の善友太子本生譚は『百座法談聞書抄』（6月19日条）や仁和寺本『釈門秘鑰』（18「人没後面々結縁経尺」）、『和漢朗詠集永済注』（雑・詠史「賓鴈繁書」）、『源平盛衰記』巻8（「善友悪友両太子」）などに見られる。まず、『百座法談聞書抄』は天仁3年（1110）2月28日から100日、さらに200日を重ねて行われた大法会の説法を筆記したもので、この法会では毎日法華経を一品、阿弥陀経と般若心経をそれぞれ一巻づつ講じられた[17]。善友太子の話は6月19日条に『阿弥陀経』供養について説く場面に

出ており、善友太子譚の「鳥類伝書」の一部分だけが収録されている。『報恩経』の善友太子では雁が持ってきた母からの手紙には両親の目が見えなくなっていたことが、また太子の手紙には弟から危害を被った話が書かれていたとあるが、『百座法談聞書抄』では、その恨み辛みの事情は省き、話の最後に「又鳥なれど恩をしれることをなむ、あはれび給ける」とあり、鳥でさえ恩を忘れずに手紙を伝えたという動物の報恩に焦点を当てている。

また、『釈門秘鑰』は唱導の大家として知られる安居院澄憲（？～1126）が自草を基に自ら編纂したと考えられる唱導文集である[18]。仁和寺本『釈門秘鑰』は18条の尺（釈）が連ねられているが、善友太子譚の「鳥類伝書」の話は18尺の「人没後面々結縁経尺」に見え、善友太子に手紙を届けた雁の話の最後に「鳥獣猶主を知る。犬馬自ら主を思う。況んや人倫をや」とあり、『百座法談聞書抄』と同様雁の報恩を語っている。特に善友太子は波羅奈国の王子で、白い雁が利師跋国に手紙を届ける内容は『報恩経』と同じであるため、これを典拠にしていたと思われる[19]。

善友太子譚の「鳥類伝書」の話は『和漢朗詠集永済注』（雑・詠史「賓鴈繁書」）にも見られる。これは善友太子が悪友太子によって、盲目にされて流離していたところへ、善友太子の母が雁を使い、手紙を届けたことを要約した内容になっている。同じく『源平盛衰記』巻8「善友悪友両太子」にも、「鳥の翅に書を付事」の天竺の例話として善友太子譚の「鳥類伝書」の話が挙げられている[20]。

日本に受容された龍宮訪問本生譚は、細かい話素の違いはあるが、「海水汲み干し型」の大施太子本生譚と「兄弟対立型」の善友太子本生譚の2つが見られる。大施太子本生譚は精進波羅蜜の比喩例、発願の比喩例として多く見られる。一方、善友太子本生譚には説話を構成する複雑な話素のすべてを使って語られたものは見られず、多くが「鳥類伝書」の話を中心に語られている。とくに説法や法会などの唱導の場面において、報恩や親子の愛情、家族の再会の題材として「鳥類伝書」の話が人気があったことは『百座法談聞書抄』『釈門秘鑰』などからうかがえる。

五、韓国に見られる龍宮訪問本生譚

高麗初期の諦觀（？～970）が著述した『天台四教儀』（第３章）にも同じく六度と証例の本生譚が挙げられている。六波羅蜜個々の名称が「檀・尸・忍・進・禅・智」となっているが、六度の例話本生譚は『大智度論』巻４と同じで、精進波羅蜜には、大施太子と片足立ちで７日間弗沙仏を讃えた話が挙げられている。ただ大施太子の海水の汲み干しについてはそれのみの記載で、詳細は分からない。

一方、「兄弟対立型」の善友太子譚は変容した形が『釈迦如来十地修行記』に見られる。これは寺などの道場や俗講で短編的に活用されて流通した講経・故事が高麗時代の忠粛王15年（1328）年に十地の形態で編集・撰述されたもので、高麗本の撰者は不明である[21]。善友太子伝はこの中の六地に収められている。『釈迦如来十地修行記』「善友太子伝」と漢訳経典の「兄弟対立型」の違いを明確にするために、先述の15話素分類に沿って、内容を紹介し類似する経典を併記すると、以下の通りである[22]。

①善友太子。波羅国王（宝鎧王）の長男――『報恩経』と同じ。

②太子を得た経緯および命名の内容はなし。

③既婚の設定。

④上聖（天神）に如意宝珠を賜るよう祈願する内容になっている。

⑤盲目の老人は登場せず、天神に祈願すると帝釈天が感動して海門大仙を地上に下ろしたとある。

⑥善友太子と悪友太子、海門大仙の三人で海に向かう。風浪が強くなると、弟は海門大仙に頼み一人竹森の所で留まった。

⑦善友太子と海門大仙は娑羯羅龍王から１つの明玉を得て帰る。海門大仙は善友太子に難時に琴を弾くように伝えて天上へ去っていた。

⑧竹森で悪友と合流する。悪友は仮眠している兄の目を竹で刺して宝珠を奪った。――『報恩経』と同じ。

⑨兄の結婚相手に求婚する内容はなし。

⑩善友太子は土地神の導きにより森の外に出た。仙客に会い、琴を与えられ、琴を弾きながら道を進み本国に着いた。

⑪鳥類伝書の内容はなし。

⑫端午の節句の龍舟行事を見に宮の外に出た太子妃は、善友太子が弾く琴を聞き、二人は再会した。

⑬国王は医官に善友太子の目を治療させるが効かない。国王夫妻は三世諸仏や天仙地喆、水府霊神に祈願し、そして太子妃に善友太子の目を舐めるように命じた。太子妃が三回善友の目を舐めると開眼した。

⑭両親の開眼話素はなし。

⑮悪友は逃亡。

『釈迦如来十地修行記』「善友太子伝」の最後にある檀波羅蜜の具足は『報恩経』のみに見られる記述であることから、『報恩経』を元にしていると考えられるが、その内容を個別に見ると、例えば善友太子はすでに結婚していることや、盲目の道案内老人の代わりに海門大仙が登場したり、琴を弾きながら流離し本国に着く部分、また夫人との再会部分と開眼する場面など、『報恩経』をはじめとする「兄弟対立型」の他の経典には見えない創作要素が多く入り、新たな作品として生まれ変わっている。

高麗末期に入り性理学が台頭すると、仏教界は儒教に比べ劣勢に置かれる。仏教界はこのような状況の変化に対応するため、修行者自らにも覚醒を促し釈迦の苦行を改めて認識させ、また大衆にも広く布教しなければならなくなった。そこで講経や俗講などの布教でよく使われていた本生譚の作品を、より大衆に親しみやすく易しい簡潔な形態にし、大衆の興味を惹く工夫を凝らすようになった[23]。『釈迦如来十地修行記』「善友太子伝」もこうした仏教界の事情を背景に生まれたもので、海に行き如意珠を得て弟の悪友太子の悪行のため苦難を強いられるが、それを乗り越えて衆生を救済するという、もとの経典の大きな枠組みは変えずに、大衆の興味を惹く内容を多く加えることでオリジナリティに富む物語を作り上げたといえよう。

「善友太子伝」は朝鮮時代初期の世祖 5 年 (1459) に刊行された『月印釈譜』

にも見られる。『報恩経』の「善友太子」の内容を若干省略はしているが、比丘らに本生譚を語る導入部から始まり、最後の因縁談を語るまでの内容がほとんど一致している。『月印釈譜』の「善友太子伝」はハングルで書かれており、韓国の国文小説、とくに善友太子をモチーフとして書かれた『狄成義伝』誕生に影響を及ぼしたことでも注目されている。

日本の『百座法談聞書抄』『釈門秘鑰』や敦煌の『雙恩記』では元の経典の内容をさらに詳しく講経していたことに比べると、『釈迦如来十地修行記』はかなりの部分を省略し、創作要素を多く加えることで、時代の要請の応じて新たな物語へと作りかえているといえよう。

六、おわりに

龍宮訪問本生譚は、釈迦が前世菩薩であった時に衆生を救済するために大海に行き、如意宝珠を得るという大きな骨組をもとに、「海水汲み干し型」、「輪廻転生重ね型」、「兄弟対立型」の３つの話型に分類できる。そのうち「輪廻転生重ね型」の『大智度論』「能施」は『経律異相』に受容されるも、その後は姿を消し、「海水汲み干し型」と「兄弟対立型」の２つの話型が残った。そして「海水汲み干し型」の大施太子譚は『大智度論』（巻 4）の精進（毘梨耶）波羅蜜の例話として挙げられ、天台系の『四教義』に採用されて、その後「海水汲み干し型」を代表するものになった。また、「兄弟対立型」は善友太子、善事太子、善行王子のうち『経律異相』が『報恩経』の善友太子の話を「兄弟対立型」の話としてまとめて以来、中国、日本、韓国で撰述された書籍では、「兄弟対立型」を代表するものとして善友太子を主人公とする話が残るようになった。

そして講経の台本として書かれた『雙恩記』や、説法の聞き書きである『百座法談聞書抄』や『釈門秘鑰』、さらに俗講として流通したものを編集した『釈迦如来十地修行記』に善友太子本生譚が取り上げられているのを見ると、善友太子譚は大衆に向けての講経の題材として好んで用いられていたことがうかがえる。

中国・日本・韓国それぞれの大施太子本生譚と善友太子本生譚の細部の話素には変容が見られる。中国編纂の『経律異相』が「兄弟対立型」をもつ3つの経典を取捨選択して1つのものとして完成させたのに対して、日本の『三宝絵』は、「海水汲み干し型」の大施太子譚を基本主題として置きながら、『六度集経』の「普施」と『報恩経』の「善友太子」の表現や話素を組み合わせて新たな創作物に作り上げている。一方、韓国の『釈迦如来十地修行記』所収の「善友太子」は、『報恩経』の話を根底に置きながら、「兄弟対立型」にはまったく登場しない要素を入れて変容させており、独創的な物語となっている。

今後、さらに龍宮訪問本生譚をモチーフに書かれた日中韓の文学作品にも目を向けて、三国の文化比較という視点を加えて検討することで、研究の幅を広げていきたい。

【註】

[1] 金泰光「日本に受容された本生譚の数と主題と経典」(『日本文化学報』19、2003年11月)103頁(韓国)

[2] 『六度集経』は訳者とされる本人康僧会の偽経であるという見解があり(伊藤千賀子「『六度集経』の成立について―康僧会の動機と目的―」(『印度學佛教學研究』61(2)、2013年))、また『報恩経』は中国の編纂経典である可能性が指摘されているが(内藤龍雄「大方便佛報恩經について」(『印度學佛教學研究』3(2)、1955年)、Supalaset Sumet『大方便仏報恩経』の成立問題(『印度學佛教學研究』)57(2)、2009年))、『六度集経』は冒頭部分に康僧会の訳者名が記され、また『報恩経』は「失訳人名、在後漢録」とあることから、たとえ中国で撰述されたとしても訳者に関する表記があることは、根底に漢訳としての存在意義をみとめている基本姿勢が見受けられるため、本稿では漢訳経典として論じることにした。

[3] 岩本裕『佛教説話の源流と展開』(開明書院、1978年)17頁

[4] 木村秀明「『不空羂索神変真言経』「護摩安穏品」所説の護摩儀軌」(『印度學佛教學研究』53(1)、2004年)443頁

[5] 『四分律』では提婆達多が仏弟子五百人を唆し破戒させようとするのを弟子らに教えるため、『賢愚経』(善事太子入海品)では仏が常に悪事を働く提婆達多を他の仏弟子と同様に接することを不満に思う阿難に語る場面、『報恩経』では大

悲の光明を照らし、悪行を働く提婆達多を楽にさせ救済する場面、『根本説一切有部毘奈耶破僧事』では現世はもちろん前世においても恩に報いることをしなかった提婆達多について比丘らに語る場面に出ている。

[6]『摩訶止觀』巻6上に「行六度滿各有時節。如尸毘代鴿是檀滿。乃至劬嬪大臣分閻浮提是般若滿」とある。

[7]『雙恩記』の先行研究および翻刻資料については、高井龍「Φ96「雙恩記」寫本の基礎的研究――特に各巻の寫本の相違に着目して」(『敦煌寫本研究年報』(9)、2015年3月)、朴光洙「『善友太子傳承』の系統的研究」(『語文研究』19輯、1989年(韓国))を参照されたい。

[8] 前掲注7

[9] 原文は以下の通り。「王問太子。出還何故愁憂如此。太子具以上事向父王說。王聞是語、語太子言。上來諸事未常不有、何足愁耶。太子言、今欲從王求索一願。王見聽不。王言吾有汝一子、甚愛念之、不逆汝意。太子言願欲得父王一切庫藏、所有財寶飲食、用施一切。王言隨汝所願、不逆子意。」

[10] 原文は以下の通り。「既迴不樂。王問曰、汝比出遊行、今何故不樂。太子曰、父王我比出遊看園苑、不知人世有此辛。為骨肉之營摸(謀)、致衣食之傷害。耕者出蟲而鳥啄、織婦紡縷以子勞。屠宰煞戮於牛羊、捕獵羅釣於魚雀。互興損害、終結冤家。苟事謾心、以強欺弱。所以不忍睹見、車馬卻迴。眾人既迫於煎煞、獨自何須於快樂。(偈は省略)王曰汝極錯吳(誤)。人之世間、貧富隨業、皆須衣而裹體、復籍(藉)食以養身。不紡而何致衣裳、不種而何求粟麥。至如飛禽走獸、大體亦然。隨果報而雖別形儀、配業緣而互相食敢(噉)。鼠為貓之煞害、匪自人教、蝶遭蛛之網並、盡隨天使。汝莫傷嘆、此蓋常規。若勞我之精神、又何名為孝道。(詩は省略)太子曰、然即如此、不敢違王。欲擬上聞、請乞一願。王曰、汝但取吾意、音樂自娛、凡有所須、我皆隨汝。」なお『雙恩記』原文は、黄征・張涌泉校注『敦煌變文校注』(中華書局、1997年(924～959頁))によった。

[11] 張春錫「敦煌講経文の引経方法の研究」(『中国人文科学』39、2008年8月)

[12] 前掲注7　高井龍

[13] 原文は「伝聞、昨夜二品女親王〔<承香殿女御>不使人知、密親切髪云々、或説云、邪気之所致者」とある。

[14] 速水侑「摂関期文人貴族の時代観」(同氏『平安仏教と末法思想』Ⅲ―二、吉川弘文館、2006年)

[15] 金泰光「大施太子説話の韓日比較研究」(『日語日文學研究』Vol.56 No.2、2006年)(韓国)。なお、同氏は「『三宝絵』上巻の構成」(『國文論叢』(26)、1998年3月)において、六波羅蜜行と本生菩薩の結合が初めて見られるのは『大智度論』(巻4)で、これが天台系の『四教義』をはじめ『天台四教儀』『天台法華宗義

集』などに踏襲され、説話集としては『三宝絵』がはじめてそれを反映し、その後 『金沢文庫本仏教説話集』（仏伝冒頭）、西教寺正教蔵『菩薩ハラ蜜』などの天台系の説話集に引き継がれていたと指摘している。

[16] 中村史『三宝絵本生譚の原型と展開』第八章「大施太子本生譚の誕生」（汲古書院、2008 年）、174 頁

[17] 佐藤亮雄校註『百座法談聞書抄』（南雲堂桜楓社、1963 年）159 頁

[18] 阿部泰郎「仁和寺蔵『釋門秘鑰』翻刻と解題」（『調査研究報告』17、国文学研究資料館、1996 年）123 頁

[19]『釈門秘鑰』の当該箇所は地名など多くのところが『報恩経』と類似しており、『報恩経』を縮約したと思われる記述になっているが、雁に手紙を託す部分が「彼在宮時、養一白鳫、太子夫人留居、朝暮戀慕、寢寐嘆念、語白鳫言、太子在時、常与汝俱、太子去不帰、汝云何不感傷、白鳫聞夫人語、悲鳴宛轉、報言、早飛去欲覓尋太子御所、夫人、悦而作書、繫鳫足及頸、鳫即飛至利師跋國、見太子」とあり、下線部のように「太子夫人」となっており、やや違和感を覚える。善友太子伝の全体は記されず鳥類伝書の一部分の記載のみで、雁書による夫婦の再会と読むべきか判断しかねるが、雁の使いで夫婦の再会が果たされる話は『百合若大臣』にも見える（『百合若大臣』と同様のモチーフであることは既に金英順氏が指摘している（「東アジアの仏伝にみる兄弟対立と孝―善友太子譚を中心に―」（『立教大学大学院日本文学論叢』(8)、2008 年 8 月、102 頁）。また朝鮮時代の 17、18 世紀作品とされる『狄成義伝』にも雁書によって夫婦が再会する場面が見られる。

[20]『源平盛衰記』では「雁」ではなく、「鷹」になっている。なお細川家蔵『和漢朗詠抄注』にも「鷹」と見えている。牧野和夫氏は『源平盛衰記』と細川家蔵『和漢朗詠抄注』の当該箇所を検討し、『源平盛衰記』の編纂に際して、所謂「永済注」に近い朗詠注の一本が参考に供された可能性を指摘している（『中世の説話と学問』「中世の太子伝を通して見た一、二の問題（2）―所引朗詠注を介して、些か盛衰記に及ぶ―」（『和泉書店』、1991 年）、336 頁））。

[21] 朴炳東「〈釋迦如來十地修行記〉の形成経緯」（『古小説研究』2 巻 0 号、1996 年 1 月）、390 頁

[22]『釈迦如来十地修行記』の板本は現在 9 種類確認できる。15 話素は尹淳一・朴元基・韓雲珍「≪釈迦如来十地修行記≫の訳註（2）」（『中国学論叢』65 巻 0 号、2019 年 9 月（韓国））によった。

[23] 朴炳東「〈釈迦如来十地修行記〉の形成経緯」（『古小説研究』2（1）、1996 年）（韓国）、金チニョン「仏経系叙事の小説的変容とその意味」（『韓国言語文学会』82、2012 年）（韓国）

＜使用テキスト＞
『生経』（『大正新修大蔵経』巻 3）
『大智度論』（『大正新修大蔵経』巻 25）
『六度集経』（『大正新修大蔵経』巻 3）
『賢愚経』（『大正新修大蔵経』巻 4）
『仏本行集経』（『大正新修大蔵経』巻 3）
『不空羂索神変真言経』（『大正新修大蔵経』巻 20）
『報恩経』（『大正新修大蔵経』巻 3）
『四分律』（『大正新修大蔵経』巻 23）
『根本説一切有部毘奈耶破僧事』（『大正新修大蔵経』巻 24）
『経律異相』（『大正新修大蔵経』巻 53）
『四教義』（『大正新修大蔵経』巻 46）
『止觀輔行傳弘決』（『大正新修大蔵経』巻 46）
『華嚴懸談會玄記』CBETA 漢文大藏經 HP（http://tripitaka.cbeta.org/X08n0236）
『雙恩記』原文は、黄征・張涌泉校注『敦煌變文校注』（中華書局、1997 年（924～959 頁））
『天台法華宗義集』（大日本仏教全書、有精堂出版部、1934 年）
『三宝絵』（新日本古典文学大系、岩波書店、1997 年）
山田昭全 大場朗 森晴彦編『宝物集』（おうふう、1995 年）
『雑談集』（三弥生書店、1973 年）
『三国伝記』（下）（三弥生書店、1982 年）
『百座法談聞書抄』（南雲堂桜楓社、1963 年）
『釈門秘鑰』（仁和寺本）（国文学研究資料館『調査研究報告』17 号「安居院唱導資料編輯（6）」、1996 年）
『和漢朗詠集永済注』（『和漢朗詠集古注釈集成』巻三、大学堂書店、1996 年）
『源平盛衰記』（2）（三弥井書店、1965 年）
『天台四教儀』（『大正新修大蔵経』46 巻）
『月印釈譜』세종한글고전 HP（http://db.sejongkorea.org/）

＜参考文献＞
干潟龍祥『本生經類の思想史的研究』（東洋文庫、1954 年）
張春錫「敦煌講經文の引經方式研究」（『中國人文科学』39（韓国）、2008 年 8 月）
小島孝之 小林真由美 小峯和明編『三宝絵を読む』（吉川弘文館、2008 年）
史在東・高國藩・全弘哲「韓・中 佛教系 講唱文學の 戯曲史的 位相」（『公演文化研究』5（韓国）、2002 年）

李康沃「仏経系説話の小説化過程に関する考察―勧念要録・釈迦如来十地行録（記）・賢愚経・善事太子入入海品・狄成義伝・六美堂記―」（『古典文學研究』4（韓国）、1988 年）

【付記】本研究は科学研究費基盤研究（C）「東アジア漢字文化圏における龍宮訪問譚の文化・思想交流史的研究」の助成を受けたものである。

Visits to the Ryugu Court in Jakata Tales
Differences in the Reception Between Japanese, Korean, and Chinese Sources

Kim, Hyo-Jin

ABSTRACT

In Jakata Tales, there are many instances of visits being made to the Ryugu Court by the living Buddha to provide salvation for the impoverished by passing many trials and acquiring the Cintamani stone and saving the living. The current paper takes up the Classical Chinese translations of Buddhist texts, transmitted through central Asia to Tibet, Mongolia, China, the Korean Peninsula and Japan through a northernly trajectory, and through analyzing the specific elements and structure of the Ryugu Jakata Tales aims to make clear and comment on the reception of such tales in Japan, China, and Korea.

Jakata tales of visits to Ryugu can be classified into the following three types: the drying of the sea type, the repeated reincarnation type, and the sibling conflict type. One chapter of the *Ta-chih-tu lun*, which is of the repeated reincarnation type, is transmitted by the *Kyouritsu Isou*, but becomes absent following that text, leaving on the two types of the drying of the sea, and sibling conflict. In Japan and Korea especially, the reception of the drying of the sea type is represented by the *Taisei-taishi-den*, and the sibling conflict by the *Zenyuu-taishi-den*.

In China, Japan, as well as Korea, there are slight variations on the elements of the story of the *Taisei-taishi-den* and *Zenyuu-taishi-den*. The Chinese edited *Kyouritsu Isou* is the result of the synthesis and selection of three sutras into one text, however the Japanese Sanpou-e places the main theme onto the *Taisei-taishi-den* of the drying of the sea type, while taking in a chapter from the *Rokudo-jikkyou*, and expressions and elements of the *Zenyuu-taishi* from the *Hou-on Gyou*, while re-arranging them into a new narrative. On the other hand, the *Zenyuu-taishi-den* found in the Korean *Seokgayeoraesipjisuhaenggi* is largely based on that of the *Hou-on Gyou*, an attempt at forging a new narrative is made by the removal of the sibling conflict type and the addition of new elements.